

セミナー

ローカルな世界から創造する「温かいお金」

主催・(社)高知県自治研究センター



講師：哲学者 うちやま 内山 たかし 節さん

日時 2011年3月1日(火)18時～

会場 高知共済会館 COMMUNITY SQUARE 3F 大ホール「桜」

目 次

開会あいさつ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

畦地和也（高知県自治研究センター理事）

講演・・ 2

ローカルな世界から創造する『温かいお金』

内山 節（哲学者）

質疑・・ 25

講演 ローカルな世界から創造する『温かいお金』

講師：哲学者 内山 節 さん

開会あいさつ

(畦地和也 高知県自治研究センター理事)

私、本職は黒潮町の役場の職員でありまして、別に自治研究センターで給料をもらっているわけではありませんけれども、数年前から特に地域の、ざくつとした言葉で言うとコミュニティー、特に中山間地域等のコミュニティーの研究をしています。

それで、内山節さんのお名前は時々新聞で読んだりなど、何となく頭の隅にずっと記憶のあった方だったのですが、数年前にたまたま、書店で本を見つけました。その本がちょうど、今、会場の後ろでも販売していますけれども、「創造的であること」という上下の本であります。パラパラとめくったときにすごくこの中に書かれている単語、言葉が目の中にボンボンと飛んで入ってきて、すぐに買って、家で読むようになりました。当時の私の課題意識が、その内山さんのいろんな言葉に響いたのだと思いますけれども、それ以来、「内山節」という名のついた本を全部買いあさりました。この農の営みの本なんかは、実は私は3冊持っているのですが、また今日も後ろで買いました。それぐらいいろんな所に置いておいて、気が付いたらパラパラとめくると



というような、僕にとっては非常にバイブルのような本ですし、最近、これも後ろで売っていますけれども、一番新しいのはこの「共同体の基礎理論」という本。これなんかは、毎日仕事に持ってくるバッグに常に忍ばせて、時間があればもう何往復もしながら読んでおります。

というようなことで、私の課題意識をすごく明快に言葉として返していただける方だったので、やはりずっと自分たちがテーマにしていることに対して示唆をいただきたいと思っていました。自治研センターの事務局に「実は、内山さん呼びたいんですけど」と相談したら、「任す」ということで、昨年末から正月にかけて、ずっとメールをしようと思いつつ、非常に恐れ多くてなかなかできませんでした。1月終わりぐらいだったでしょうか、思い切って、お聞きしたメールにお願いをいたしますと、快く受けていただいて、本日のことになったということでもあります。

今日は、その内山さんが最近おっしゃっている「温かいお金」、それから反対

の言葉である「冷たいお金」のことについてお話をさせていただきますけれども、内山さんの世界というのはこれだけに限らず、非常にいろんな世界が存在していますので、実は内山さんには何の相談もしてないんですけれども、できたら今後しばらく私たちとお付き合いしてもらいながら、この高知を良くするために、みんなで高知の哲学をつくっていくような取り組みができれば、ということも考えております。ですから今日はその第1回目ということで、決して大人数でやるような会でもないと思っています。私はむしろ、これぐらいの小さな人数で、それぞれの方の顔を見ることができぐらいの会場の雰囲気というのが非常にいいのではないかと考えていますので、できるだけ前の方に座っていただいて、内山さんと本当に、しわまでお互いが見ることができるぐらいの距離に座っていただいたら、と思っています。

そういうことで、今回のこのセミナーについては、ほとんど私のわがままで計画をしたというようなことになりますけれども、今回初めて内山節さんというお名前を聞いた方もいらっしゃるでしょうし、その考え方、哲学に初めて触れる方もいらっしゃると思いますが、ぜひ、今後の高知の地域づくり、山間地づくりの参考にさせていただけたらと思っています。

簡単でありますけれども、以上、今回のセミナーの意図につきましてご説明いたしました。

(司会)

ありがとうございます。

非常にプレッシャーの掛かるような紹介になりましたので、申し訳ないような気もいたしますが。

それでは早速、内山節先生、よろしく願いいたします。

(内山 節 さん)

大変恐縮する紹介をいただきましたが、内山でございます。

高知はたぶん20回ぐらい来てるんじゃないかなと思います。随分よくまいりました。先ほどの紹介で、裏山が1ヘクタールぐらいあるというふうに紹介されたのですが、山で使っている道具は土佐山田で買ってあります。土佐山田に買い物にただただでも2、3回あります。

今日、ローカルな世界ということとお金の話を題としてはいただいているんですけども、初めに、ちょっと最近考えていることからお話いたします。

というのは、人間というのはどうして誕生したのだろうかということなんですけれども、一般的に言うと人間は知性がある、あるいは理性がある。だから、知性の働きで他の動物とは違う。道具をつくったり、文明をつくったりして、そういう生き方をしてきたのだ、というのが一般的な言われ方です。

ただ、昔からこの見解には少し疑いを持っています。というのは、ヨーロッパの思想というものが非常に人間中心主義的で、かつ知性中心主義的といった傾向を持っていますので、あらかじめ人間を頂点に置く発想があり、あらかじめ知性というものがすべての中で最高位に属するんだという発想があって、そこから出てきた考え方ではないかというふうな気持ちを持っていました。有名な人にデカルトという人がいますが、デカルトは「我思うゆえに我あり」という有名な言葉を残したんですけれども、あの言葉も、デカルトというのは懐疑派の人ですから、いろんなことを疑って掛かると。だけど、疑って掛かるけれども、今考えている自分、疑っている自分、それは確かに存在するという意味

合いの言葉がございます。ですから、まさに人間の本質というのは考えているとか、疑っているとか、まさに知性や理性の働きです。それが人間の本質であるというのがデカルトの考え方の1つでした。

そういうことに象徴されるように、ヨーロッパの思想というのは人間が中心だし、知性が中心でした。だけど、果たしてそうだろうか。というのは、私も今紹介されたように、群馬県の山の中に半分だけ暮らしております。そうすると、たぶんこちらもそうでしょうけど、今は動物が多過ぎて困っているといえますか、イノシシとかシカとか猿とか、私の畑も散々な目に遭っているんですけども。ただ、そうやって身近にいろんな動物たちがいるのを見てみると、決して人間だけが知性を持っているわけでもないし、ただ必要なことが違うといえますか。例えば、人間はお金なんていうものを必要なものとして考えているけれども、キツネやタヌキはお金は必要ではないわけで、何の関心もない。その代わり、彼らが生きていく世界で関心を持っていることについては非常によく知っているわけです。ですから関心領域が違うだけであって、実は大変なくせ者でもあるし、知恵者でもあるし、思考力も持っているというふうにも思っています。

ですから、理性や知性があるから人間がこういう世界をつくったんだというふうに考えるのではなくて、別の発想で、人間はなぜ誕生したのかということを考えてもいいのではないかと思っていたのですが、実はつい最近、昨年あたりから大体こういう見解に、私自身としてはなっていた。それは何かといいますと、人間はこの地球上に極めて弱い生き物として誕生したのではないかということなのです。そう考えてみると、人間は走ることはできるけれども、トラやピューマのように走りながら獲物を捕ってくるという、それだけの脚力は持っていない。あるいは木にも無理をすれば登れるけれども、しかし、リスのように身軽に上がることはできない。つまり鼻の力、耳の力でも、犬よりもはるかに劣っているし、恐らく舌の力も劣っている。こう考えていくと、人間というのは能力的には極めて弱い、大したことのない生き物という気がしてきます。さらに言うと、例えば牛だったら草さえ食べていけば、あの大きな体をつくっていくことができる。つまり、それだけの消化能力を持っているということですが、人間は、残念ながらそれだけの消化能力は持ってないですから、その点でも非常に弱い。また、山の生き物たちでしたら、地面に落ちているものを拾って食べたり、時には腐った肉を食べたり、そんなことをしても平気で生きていくことができるわけですが、人間の方は腐った肉なんか食べたら、たちまち自分の命の方が危なくなってしまう。ですから、どこを取ってもどうも能力のない、弱い生き物、それが人間だったのではないかという気がしてまいります。

しかし、そう考えていくとほかにも弱い生き物はいるわけです。例えば、水の中にいるミジンコなどというのは、ひたすら魚の餌にされていくようなもので、決して強い生き物とは言えない。最近の研究ですと、ミジンコも魚が近づいてくると体をとげとげにして、魚が飲み込もうとすると口がいがらっぽくなっていくといえますか、そうやって防いでいるんだというのが最近出ていました。それにしても、あまり強い生き物とは言いがたい。あるいは哺乳（ほにゅう）類でも、例えばネズミなどというのはあまり強くないわけで。そういうふうな弱い生き物というのはまた1つ独特の能力があって、それは強烈な繁殖力を持っているということです。だから、ネズミもまたネズミ算式に増えていくし、それからミジンコなどというのは、ひと月もすれば何百倍になるのか分か

らないぐらい増えていきます。そうやって大量に増え続けることによって、いわば弱いけれど種の保全是大丈夫という、そういう生き方を確立していったというふうに思えばいいと思うのです。

ところが、人間の方は繁殖力も大したことないので、よほど頑張っても、つい先日北海道で11人子どもがいる人に出会いましたが、このへんがたぶん一番頑張っても限界ぐらい。場合によったら、一人も生まれないということも十分あり得るわけです。ですから、繁殖力も大したことがない。しかも弱い。そういう生き物だった人間たちが、どうやって自分たちの生きる世界をつくろうとしたか。それは、いろいろなものと関係を結ぶことだったのではないかという気がしてきたのです。先ほど言ったように牛だったら、草との関係だけがあれば取りあえず生きていくことができる。だけど、人間の方は草だけではとても生きていけませんから、山菜のようなものを食べるけれども木の実も拾わなければいけないし、魚も取らなければいけないし、時には動物も追いかけなければいけないしと、実にいろいろなものと関係を結んで、自分たちの生きる世界をつくっていく。しかも、それらを取ってくるときにも、あんまり能力がありませんから、何か道具を使わないと取れない。さらに言うと、人間たちが協力し合わないと取れない。だから、木の実ぐらいだったら長い棒か何かを持てば、下からはたき落として拾うということもできるでしょう。しかし、魚を取るとかとなってくれば、何らかの道具で魚を釣るとか突くとかするか、もしくは、よく昔の漁法で行われたようにみんなして追い込んで行って、今でも四万十川のアユ漁などはたいまつで追い込んでやっていますけれども、まさにみんな協力して追い込んで行って取るなどです。だから、そうやって人間同士が関係を結ぶ、あるいは自然ともいろいろな関係を結んでいく。また、さっき言ったように、バクテリアやウイルス、寄生虫などにも大変弱い生き物ですから、そうするとやはり火を通さないと大半のものが食べられません。

人間と人間

人間と自然との関係性

私の村は秋の10月ぐらいになるとトチの実がいっぱい落ちてはいるんですけども、私たちはそれをあく抜きしないと食べられません。しかし、クマなどはあく抜きしないでどんどん食べているわけです。やはりそのへんの違い、結局、人間の方は何か加工するという作業をしないと、かなり多くのものが食べられません。そういうことによって、実は非常に多様な関係を結んでいった。

だから、自然との間にも多様な関係を結んでいくし、人間同士も多様な関係を結んでいく。この多様な関係を結んで生き延びていくというのが、人間を人間たらしめたというふうに言ってもいいし、なぜそうしなければいけなかったのかといえば、弱かったという、僕はそこに尽きるのではないかと。だから、弱い生き物が多様な関係を結ぶことによって、自分たちの生存空間をつくっていく。ここに人間の発生があって、そこから多様な関係を結ぶ中でいろいろな道具を作っていくし、それから今度はいろいろな文明をつくったり、社会の仕組みをつくったりすると。そのことによって、実に本当に多様な関係を守っていきけるような、そういう生き方をしたのではないかという気がしてきます。むしろ知性や理性というものは、そのことから生まれてきたと言ってもいいわけです。出発点は知性や理性ではなくて、むしろ弱い生き物が多様な関係をつくって生き延びようとしたという、そのことの方に根拠を求めた方がいいのではないかというふうに、昨年ぐらいからですが思い付きまして、今はそういう気持ちに

なっています。

そのことから言うと、多様な関係とともに生きるというのは人間の本質に本来なら属するものであって、それは何らかの手段ではないという気がしてきます。つまり、多様な関係をつくってこそ人間は人間であったわけです。人間の本質に属するというふうを考えておいた方がいい。

人間の歴史というのは、本当に多様な関係をつくっていく歴史というふうに言ってもいいし、先ほど私も土佐山田の方に刃物を買いに来たとはいましたけれども、あそこに行きますと、例えば鉈(なた)に属するようなものでも実に多様な道具があります。あれだけのものを作っているのはここをおいてほかにはないだろうという気がしてきます。結局、あれだけの道具がなぜ必要だったのか。いろんな関係をつくっていかうとすると、やはりいろんな道具が必要だったと、それをつくってきたのだろうという気がします。ですから、そうやって本当に多様な道具もつくったし、多様な人間の結び合いもつくったし、さらには、歴史との結び合いや文化との結び合いといったものをすべて作り上げながら、ずっと人間の歴史は展開をしてきたというふうに言ってもいいのです。

そういう点から言うと、この30年間というのはちょっと異常な時代をつくったわけです。なぜならば、人間たちが自分たちが持っていた多様な関係を切り捨てながら生きてきたわけです。一人ひとりがばらばらになって、個人で生きるという時代を作り上げた。これは長い人類史から言うと、極めて一時の変な時代といいますか、それをつくってしまったのではないかという気がいたします。結局それは、単に個人がばらばらになって、今、NHKなんか「無縁社会」などというキャンペーンを張っていますけれども、そういうふうないろんな出来事が起きてきました。だからもうちょっと結び合いましょうという、そういうレベルのことではなくて、人間が関係を切り捨てながら生きてきたということは、人間自身が自分たちの本質を自己否定したというふうに考えてしまった方がいいのだろうという気がします。だから、ちょっと不便だからまた関係を結ぼうという発想よりも、何か人間自身が自分を否定していく、あるいは壊していく、実におかしなことがこの数十年間に浸透したのではないかという気がしています。だからこそ今、時々目を疑いたくなるような事件が起きてくるわけです。これは、単にそういう現象が起きているというだけではなくて、どうも人間が人間の本質を否定してしまった結果、ちょっと通常考えにくいような事件が起きてきたのではないかという気がしています。

こういうことが戦後、展開していく歴史の中では、特にヨーロッパ社会の近代という時代です。つまり市民社会が形成されて、人間が個人として生きていくというヨーロッパの近代史ですが。その時代に対して、かなり多くの誤解があったのではないかという気がしています。実は私、日本との比較地としてフランスを使っていて、1年に一遍ぐらいフランスに行って向こうの様子を見ているという、そんなことをずっと30年近く続けてきたのですが。向こうに行き始めたころに、もちろん僕の場合には一番長く居たときで4カ月ぐらい居たときがありますけれども、最近ですと10日ぐらい行って帰ってくるぐらいで、ほとんど観光客という感じですけども。ただ、一番初めのころに行ったときに非常にびっくりいたしました。というのは、フランスというと個人主義の国とか個人主義の社会、あるいは個人の社会というイメージを持って行ったけれども、行ってみると、日本の方がはるかに個人主義的な社会をつくっていたのです。そのことにちょっとびっくりいたしました。

まず驚いたことは、家族の結束力の強さです。それには本当に驚きました。

だから、何かあるたびに「家族」というものが出てきました。当時フランスですと、二十歳を過ぎてくるとみんな独立して、自分の家に住んでいて、二十歳過ぎの人が親と同居しているということはほとんどなかったのですが、しかし必ず近くに住んでいて、それで週に一遍ぐらいは家族でパーティーをやったりして、そういうときには少し遠くにいる人たちもみんな集まってきている。非常に強い結束力を持っている。あと当時、大学生ぐらいの人たちに会っていると、「今、就職を探している」と。フランスは結構早い段階から就職難になっていましたから、結構就職するのが大変なのです。「どういう所に就職しようと思っているの？」と聞くと、「例えばこういう所にしようと思っています」。「どうして決めたの？」と聞くと、「おじいさんが決めました」とか、そういう話というのはごく普通にありました。「え、おじいさんが決めたの？自分で決めたんじゃないの？」と言うと、「僕よりもおじいさんの方が人生経験長いですから、判断を間違えませぬ」というのがごく普通に出てきます。実際、そんなふうにいるんなことを家族で相談してやっています。

そのうちしばらくすると、フランスも日本式のゴルフ場などができてきて、今、結構あるのですが。しかし、日本と随分違うのは、例えば日曜日にお父さんがゴルフに行ってしまった。お母さんは、どこか中心部に買い物に行ってしまった。小学生ぐらいの子どもが2人して家でテレビを見たりして留守番をしている。日本だったらよくある光景なのですが、これをやりますと、もう周囲から「あの人は子育てを放棄した人」というふうに、激しい非難を浴びることになります。それに、日曜日というのは家族で過ごす日なのです。ですから、もしもどうしてもお母さんが買い物に行きたいということになると、お父さんはゴルフをあきらめて、家族4人で買い物に行くということになります。逆に、お父さんはどうしてもゴルフに行きたいという場合には、家族4人でゴルフ場に行く。それで、ゴルフ場の中にちょっと遊ばせる場所があるので、そこでお母さんと子どもたちが、プレーしている間だけは遊んでいるというケースもあるし、それから一緒にキャディーさんのようにくっついて歩いているというケースもあります。ともかく、一緒に過ごす日が日曜日です。ですから、家に子どもを置いておくということは信じられないという雰囲気、びっくりいたしました。

さらに言えば、夜8時か9時を過ぎて、女の人が家族を置いて外出しているというの、信じられないぐらい非難を浴びる行為です。ですから、男の人も毎日飲んで11時に帰ってくるというのは信じられないぐらいの行為です。男の人は結構、飲んで遅くなる時はあるんですけど、それでもそれは週に一遍とか、それぐらいにしておかないと激しい非難を浴びるといいますか。特に女の方は大変で、大体8時過ぎて子どもが家にいて、外に出てしまったということになると、ほとんど子育て放棄の無責任お母さんということになって、激しい非難を浴びるといいます。だから、私たちが家というか日本で習っていた自由の国とかいうフランスが、実はこんなに制限が多いのかということにびっくりしたということがあります。常にそういう家族の結束力、だから家族の持っている共同体的機能というのは強烈になっていて、それはその後どんどん強化されていて、最近ではフランスでも親子同居して暮らしている、つまり3世代ぐらいの人が一緒に暮らしているというケースも結構出てきていて、ますます強い家族の結束力になっています。

それからもう1つ。当時、労働者、フランスは日本と違ってはっきりした階級社会でして、上流階級の方は上流階級の人、労働者は労働者という、その

ところが実に明確でした。その後だんだん壊れてはいくんですけど、それでも今の日本と比べれば、まだはっきりした階級社会と言ってしまっても構わないという社会をつくっています。ですから居住区も違うわけで、労働者たちは労働者のアパート群みたいなものがあって、そういう所に暮らしています。それから上の人たちは、そういう人たちが住むような所に住んでいます。だからはっきり、例えばパリを半分にしてこっちとこっちではないんですけど、どこの地区にも労働者が住んでいる地区もあれば、もうちょっと上の人が住んでいる地区もあるといったような、そういう社会をつくっています。

当時、今もフランスは所にもよりますけど、日本ほど治安は良くありませんので、観光旅行をしている分にはそんなに治安が悪い国でもないのですが、日本よりちょっと悪いか、くらいに思えばいいといえますか。ただ住んでいる人たちは結構大変で、しょっちゅう泥棒に遭います。ですから、家の玄関の鍵が8つぐらい付いている家や、それから、特に旧市街というか昔の建物が残っている場所というのは景観保全地域になっていて、家の中はどう改造して



もいいんですけども、外観は直してはいけません。だからもし壊れたら、元とそっくり同じに戻さなければいけないという決まりになっています。そうすると、玄関ドアというのは外に位置するのです。つまり、内側はピンクのペンキを塗ってしまっても構わないけど外側のドアは、そこはいろんな人が見る場所になりますから、昔のとおりドアでなければいけないというのです。よくグリーンか何かに塗ってあるような、茶色い場合もありますけど、ちょっと重そうな木のドアが付いているのがあるんですけども、木のドアをチェーンソーで穴を開けて入られてしまうとかいろいろなことがあって、かなりのうちが大変お金を掛けて、実は中に厚い鉄板を入れて、しかし元のとおり木をまた張って、それで外の外観を同じにしておくというようなことをしたりして、その上に鍵を8つぐらい付けている家がざらにあって、誠に大変という感じでした。

そのころに労働者アパートが並んでいるような所に行くと、どこの家にも鍵一つなかったり。労働者というのは、共同して生きてこそ労働者であるという考え方が強くて、だから鍵をかける、家のドアを閉めてしまうというのは、自分たちの共同の世界を破る行為という、これは逆に非常に非難を浴びる行為です。もちろん寝るときにドアはしまっているのがいいんですけど、鍵をかけるということになると、みんなから「労働者らしくない」という非難を受けるといえますか。ですから、すべての部屋がほとんど開けっ放しに近い状態で、労働者のアパートに取りに行ってもあまり取るものもないんですけども。だから子どもたちなんかは、すべての家を使って鬼ごっこをしたり、隠れんぼをしたりして遊んでいるというような雰囲気でした。伝統的に、労働者というものは常に労働者の共同体をつくって、そこで助け合いながら生きていくと。だか

ら、労働者は個人になってはいけないというのが、伝統的なフランスの労働者の考え方です。だから、労働者も共同体なんです。それに対してもう少し上になる人たちというのは、労働者共同体にはもちろん属していませんから、そうすると強力な家族共同体なわけです。親戚も含んだ一族共同体みたいなものを形成しながら、そこで助け合っていると。だから、実はフランスの近代市民社会としては、一面では個人主義的な社会をつくったんだけど、その暮らし方としては、その一方において強力な共同体を形成するといえますか、両面を持ってつくられてきたのが近代のフランスだったのです。

例えば、労働者たちが集まるカフェやバーなどへ行きますと、実に不思議なメニューが壁に張ってある場合が多かったわけです。それは「バターつきパン」というメニューなんですけれども。フランスですからバケットを半分に切って、そのまん中にバターがベタッとついているだけのメニューです。それが恐ろしく安かったわけです。日本円にすると20円とか30円ほどでした。これは物価から考えると、お店としては赤字を出しているのではないかというメニューです。それが大体どこのカフェにもありました。例えば、これを私が注文した場合には、もちろん持ってきてくれますけれども、たぶんそこにいる客みんなから嫌な顔をされることは間違いないといえますか、「まあ、彼はたぶん旅行者で分からないから仕方がないんだ」と言いながらも嫌な顔をしてみんなが見るといふ、たぶんそうなると思います。それはどうしてかという、このメニューは失業中の人たちのメニューなのです。みんなが集まっているカフェに行って20円ぐらい出せば、そこで取りあえず「バターつきパン」という1回でお腹がいっぱいになるぐらいのものがあつたりします。もしそれでコーヒーでも取ればそれでいいし、あるいは、たぶん誰かがコーヒーをおごってくれるという気がします。「バターつきパン」だけだと、店は赤字なわけですからそれはみんなが、例えばコーヒーを飲んだり、ちょっとアルコールを飲んだりして、そのお金を回しているわけです。だから、これもまた一つの共同体の助け合いの仕組みといえますか。ですから、今働いている人などがそのメニューを注文してはいけないというのが、これも暗黙のいうルールといえますか。だから、こういうところにも非常に強い絆をつくって生きてきているわけです。

それで、これも伝統的なルールですけれども、失業者がいるのに残業をしている人がいるというのは大変な非難を浴びるわけで、つまりそれは、失業者の仕事を奪っているということです。ですから失業者がいない、もしくは社会としては1%ぐらいの失業者は当然ながら発生しますので、1%か2%だったら、事実上完全雇用状態というふうに言ってもいいといえますか。ですからそれぐらいのときはいいわけですけれども、本当に求職活動をして仕事もなかなか見つからない人たちが発生してきた場合には、労働者というのはみんな残業は拒否するわけです。残業するだけの仕事があるのならば人を雇えという要求を出すということです。そこで、失業者がいるのに、自分は残業して残業手当を稼いでいるなんて話になると、これはもう大変な非難を浴びてしまうということになっていきます。だからこのへんも、やっぱり労働者共同体の助け合い方というのがあって、最近のフランスはそれも随分崩れてはきているのですけれども、でも日本と比べるとはるかに強固に今でもあるというふうに言ってもいいと。だからこんなふうに、実は近代市民社会というのは、一方でその内部に労働者共同体とか、それから職業別共同体みたいなものもありますけれども、あとは家族の共同体や一族の共同体とか、実は幾つかの共同体を残しながら来たわけで、ただ単にばらばらになっただけではなかったということなのです。

そここのところを日本のヨーロッパ研究者たちというのはちゃんと伝えてこなかったわけです。だから、すべて個人になっていく、すべてばらばらになっていくのが欧米に近づくことだという、実に誤った宣伝をしてきました。それを額面どおり日本が実現してしまった。そうなってくると、どこにも共同体的な結び合いがない、ばらばらな個人が発生してしまっていて、それは、一面では生きにくい社会もつくってしまったし、それからいろんな問題、今、本当に社会で議論されているような、無縁社会から始まっているいろんな問題を発生させてしまっていると。ともかく、山手線の忘れ物の第2位は骨壺ですから。傘の次は骨壺という時代をつくっているわけです。これは忘れたのか、故意に置いていったのかはともかくとしまして、本当にそういう社会になってしまったわけです。たぶんこれは、最初に申し上げたとおり、ちょっとまずいねというレベルを超えていて、人間の持っている本質が否定されてきた時代だというふうに思ってしまった方がいいのだろうという気がいたします。

そういう時代の中で、まさにお金というものが猛威を振るっているというふうに考えていかなければいけないということだと思ふのです。つまり、貨幣というものを考えた場合、貨幣自体の歴史というのは結構長いわけで、日本でも和同開珎の少し前ぐらいから、流通し始めたのは、和同開珎（わどうかいほう）と言ってもいいし和同開珎（わどうかいちん）と言ってもいいけどあのへんからでしょうけど、その前ぐらいからお金らしきものは作られていたといひます。ですから結構長い歴史を持っているわけで、それは結構地方にも伝わっているわけです。決して、奈良とかあの辺だけで使っていたわけでもないといひます。そういう歴史があるわけですが、長い間貨幣がありながらも、必ずしも人間たちは貨幣を額面どおり使ってきたというわけでもありません。レジュメどおりにはなりませんけども、むしろ昔の使い方というのは貨幣を儀礼的に使っているというケースが多くて、例えば、それは今のお葬式のお香典みたいなものだと思ってもらえればいいのですが。なぜかお葬式のお香典には物を持っていくことができないわけで、お金を持っていくというのがルールになっているわけです。もちろん、お花か何かをおくるということにはできますけども、お葬式の時に、ようかんや果物を持っていくというのは普通ないわけで、必ずお金を持っていくと。しかも、そのお金については何となくルールがあつて、「このケースだったら1万円ぐらい」とか、それは地域によって結構取り決めが違つたりしますが、そういう、何となく地域社会の中で「このケースはこうだ」という大体の決まりがあります。しかも、お香典返しについても決まりがあつて、うちの村になるとお香典返しというのはその場で渡します。ですから、その場で同じものが山積みになつていて、帰るときに1つずつ渡されると。だから、お香典の金額に関係なく同じものを渡す。

お金の社会性

お金の持つ不思議さ

私が上野村（群馬県の南西部にある村）に行き始めたころ、1970年代ですけども、そのころですとお香典返しはお米5キロというのが多くて、大抵そうでした。ですから、お葬式に行くと帰りは重くてしょうがないという感じだったんですけども。上野村というのは田んぼがない村ですから、そこでお米を出すというのは伝統的には意味があつたんでしょう。最近はお米がなくなつてきて、もう少し軽いものになりましたけど、そこで渡すというルールはいまだに変わりません。東京の方へ帰つてくると、お香典返しというのは大抵半返しという形で、金額を見て半

分ぐらいのものを後で送ってくるということが普通という感じですが、本当に地域によっていろんなルールがあります。地域によっては、例外的なんでしょうけど、その場で、現金で半分返すという地域もあるそうです。いろいろあるんだなというふうに思いました。

例えばお葬式に行くことになって、1万円ほど包んでいこうと。この1万円の金額が妥当かどうかについて、実は誰にも分からないのです。ただ、その地域ではそういうルールになっているから1万円にしているという、ただそれだけのことであって、「1万円が正しいのか」と言われても全然分からない。つまり、全く儀礼的なお金の使い方なのです。

実は江戸期ぐらいまでは、一般民衆というのは結構そういう使い方をしていくというのです。だから、こういうケースではお金を使う。当時の人たちの感覚というのは、例えば農村の百姓たちといいますと、むしろお金をつくらなければいけないことが起きたときに、「お金を買いに行く」という感覚があったりします。仮にお米を作っている地域があるとすると、馬の背中などに乗せて町にお米を売りに行くんですけど、それはお米を売りに行くという気持ちよりも、お金を買いに行くということです。それで、買って来たお金を何か必要があって使うという、そんな感じなんです。だから、今私たちはお金を売るとかお金を買うとか、あまりそういう感覚がなくて、ものを買ったときに代金を払うという感覚になっているのですが、昔はちゃんとお金もひとつの商品だったわけです。だから、人に会うときにお土産を持っていこうと思ってお土産を買いに行くのと同じように、お金を買いに行くという、そんなことがあったというのです。そのうちに、少し余裕があればお金を家の中に置いておいて、昔は茶だんすや仏壇の下などに置いておいて、それで何かそういう儀礼的に使う必要があったりするときに出してくるというような、そういうやり方が多かったといいます。だんだん江戸時代も終わりの方になってくると、結構商品経済が盛んになってきますから、お金を代金として払うというのも出てはきますけど、一方において、まだ儀礼的にお金を使う、お金を買うという感覚というのは結構残って来ました。今、それが残っているのは、さっき言ったようなお香典などです。

それから、逆に最近発生したのは、結婚式のときのお祝いなどです。私が子どものころは結婚式のお祝いに結構物をあげたりしていたような気がするのですが、いつのころからか「お金にしよう」という話になって、最近は何かそんな感じなんです。私も最近、立教大学という所に勤めているのですが、大学院の学生さんが時々結婚式を挙げるときに「むやみに結婚するな」と言っているのですが。というのは、相場が教員は5万円になっておりまして、「毎月結婚式なんかされたらたまったもんじゃない」と、よく言っているんですけども。そういう相場ができてきました。これも高いのか安いのか、ちょっと僕にとっては高い気がしていますけれども、よく分かりませんが。そういう社会通念がだんだんできてきてしまうと、そのルールに従うといったような使い方です。

結局、この儀礼的に使っているお金というのは、実は額面はどうでもいいのです。決まりが1万円なら1万円だし、決まりが2万円なら2万円だけというだけであって、別に額面にとらわれているわけではないのです。そういうお金の使い方をしてきた時代から、今日というのはもろに額面が乱舞している時代というんですか、そのようになってきたという気がいたします。結局それはどういうことかということ、お金を使う過程において関係を結ぶということがだんだん弱くなってきた、ということだろうと思うのです。さっき言った、例えばお葬式のときにお香典を持って行くとか、結婚式のときにお祝いを持って行くと

いうのは、その関係の中で使っていくわけです。すると、その関係の中で何となくできている儀礼的なルールがあって、それに従っているということです。

それに対して、例えば私たちがスーパーに行って買い物をする。そこでは何の関係も発生してないわけです。ただ、そこにある野菜を買ったり、お菓子を买买たりしているわけです。すると、そこで出てくるのは「裸のお金」と言ってもいいし、額面だけのお金がやりとりされてきます。ここに、お金を使うと言いながら、実は関係の中でお金が使われているときと、関係がない世界でお金が使われているときというのは、全く内容は異なってくるということも少し注意しておいてもいいのだろうという気がいたします。

それは私たちにはよくあるわけで、例えば一人でご飯を食べに行った。そうすると、お店の人がレジで300円ほど余分に請求してきたと。たぶん、それは間違いなく「ちょっと、間違っていないですか」と言って、訂正をしてもらって支払うという形になります。つまり、そこではちゃんとした関係ができてないわけですから、額面どおりの取引しかないので、そうすると300円多かっただけで、たぶん私たちは文句を言うということになってきます。ところが、そこにいろんな友人たち数人と一緒に食事に行くとすると、そこではお店の人が間違えることではなくても、結構自分が食べた以上のお金を払っていたり、場合によったら「まあいいや、今日はおれが払うから」などとやっているケースもあるし。それからあと、そこに若い人、特に学生さんのような人がいたりすると、「学生はいいから、みんなであと割ろうか」とか、適当にやっていたりするわけです。しかも、そこでお酒を飲んだりすると、正確には誰が幾ら食べたのかもよく分からなくなってくるわけで、みんなして割り勘にしようとなっても、金額からいうと飲まない人はやや不利なお金を払っているとかいうことが起きているはずですけども、別にそのことは誰も気にもならないし、どうでもいいと。結局それは、ある関係を持っている人たちが数人で行って、食事をしたり飲み会をやったりしていると、厳密な額面どおりの支払いじゃなくても別にどうでもよいという気持ちになってくるわけで、しばしばそういうことが起きます。

だから、私の村によく知り合いたちがやってきて、帰りに、例えば「じゃがいもが欲しい」とか、それから果物を作っている人もいますので、「その果物が欲しい」とか言われます。そうすると、そここのうちに電話をして、今あるかと聞くと「あるよ」という話になって連れて行って、その人が買い物をします。そうすると、そういうときというのは、その人は初対面の関係ではあるのですが、私とは両方関係があります。そういう感じの中で買い物をしてくると、一応「それで、お幾らですか」という話が出てくるのですが、村の人たちも「う〜ん」というような感じで「じゃあ、1,000円でいいや」とか、多かったら「じゃあ、2,000円でいいや」とか、実に大ざっぱな話が出てきます。そうすると、むしろ買った人の方が「それじゃあちょっと悪いから」というので、少し多めに置いてくるとか。それからあと、そしたらどうしても受け取らないなどというときもあって。そうすると今度、東京に帰ってから、何か別のものをまた送ったりなんかしていて。これも、関係の中で取引しているわけです。そうなってくると、また金額なんかどうでもよくなってきていて、もちろん2、3千円のもものが10万円とか言われたら、それは関係を壊す行為ということになってしまいますけど、そんなことはあり得ないわけです。売る方も買う方も、むしろ買う方としては「損のない価格で売ってくだされば結構です」という感じになってくるし、それから売る方も「せっかく訪ねてくれたんだから、場合によつた

らただでもいいよ」みたいな感じになっていったりします。つまり、ここにはまさに額面を超越してしまった取引というのが、やはり関係の中では発生するわけです。だから、関係の中で貨幣を使っているときに私たちは貨幣にどんな価値を見いだしているのかというと、額面だけではなくて、その関係の中に価値を見いだしている。そのところがうまくいくようにお金を使っているだけで。それに対して、関係がないところでお金を使うと、まさに裸の貨幣としての額面しか、ビター文出さないというような使い方をします。つまりこのところに、ある意味でお金の持っている不思議さというのがあるのです。

「冷たいお金」「温かいお金」

額面を超越して・・・

実は「冷たいお金」、「温かいお金」というのは、2年ぐらい前に私が出した「怯えの時代」という本がありまして、そこで使った言葉です。そのときの問題意識というのは、当時、今もそうですが、「振り込め詐欺」や「オレオレ詐欺」などというのが社会で頻発していました。不思議なのは、その詐欺に遭っている人たちが、そういう「振り込め詐欺」や「オレオレ詐欺」というのが社会でいっぱいあるんだということを、実は知っているんですね。つまり何のニュースも知らなくて、突然電話がかかってくる、引っ掛かってしまったというのではなくて、ニュースを見ては「こんなことをする人がいるんだね」と話をしているような人たちが引っ掛かっているのです。だから、十分注意しなければいけないことを知っているのです。また、決して認知症になった人が引っ掛かっているわけではないわけで、全く普通の人たちがころっと引っ掛かっているわけです。どうしてこんなことが起きるのだろうかという、そのへんのことを少し枕に使ったということもありました。結局、これが今の社会を象徴しているわけですが、歳を取れば取るほど人間たちは裸のお金、額面だけのお金、あるいは私が呼んだ「冷たいお金」、そういうお金を使うようになっていくといえますか。例えば、毎月年金が幾らかきて、それで生活をしていくと。しかも、だんだん歳を取ってきて付き合いなども少なくなってくると、まさにこの入ってくるお金で、場合によったら家賃を払ったり食費を出したりして、そういうことだけの生活になっていくという。そうすると、本当に額面をどう分配するかということだけになっていくみたいなのがあって、だから気が付かないうちに、本当に日々冷たいお金、額面以外の価値が何もないお金にのめり込んでしまうような、そういう生き方を強いられているということです。ところが、それが久しぶりに例えば息子や孫から電話があって、「困ったことが起きたから助けてくれ」という話が来ます。そうすると、そこでは本当に何年ぶり、あるいは何十年ぶりに、ある関係が回復するといえますか。しかも、それは本当に困ったときに自分を頼りにしてくれたということを感じると、やっぱり何が何でも助けてあげなければということになります。つまりそのときのお金というのは、もう額面を超越しているわけです。だから、貯金が100万円しかない人が、その100万円を振り込んでしまったりしているわけです。そこでは額面を冷静に考えれば、そのお金はお葬式用にとってあったお金だったりするわけで、「そんなものを使ってしまったら、後で困るでしょう」という、そういうことなんだけども、ずっとそのお金の冷たさの中でだんだん生きることを強いられてしまった人たちが、本当に温かい世界でお金を使うという、そのお金を久しぶりに回復したといえますか。そのことがあるからこそ、ころっと引っ掛かってしまうという。このへんが本当のところだろうという気がいた

します。

どうもそこらへんから考えてみると、私たちの社会には冷たいお金と温かいお金がある。結局それは何の関係も伴わないお金の使い方といいますか。それは本当に額面だけだし、「冷たいお金」という言い方をしてもいいし。それに対して、額面を超越してしまうようなお金の使い方、つまり関係の中でお金を使っていく、そこに温かいお金の使い方があるということなんだという気がいたします。

ですから、そういうふうな視点から見ていくと、先ほど言ったとおり日本において貨幣の歴史は結構長い。だけど、非常に多くの場合に貨幣というのは儀礼的に使われたり、それからむしろ温かいお金として、ある関係の中で使われていくという、そういう使われ方をしてきたのだろうという気がするのです。それが、今日になってくると本当に冷たいお金の世界になっていって、それだけになってしまうわけです。私もあまりテレビを見たりしないのですが、昼間なんかテレビをつけるとびっくりするのは、保険の広告の多さです。いわゆる「入院したときに幾ら払ってくれる」とか、「毎月 3,000 円払うと、入院時はこうです」などという式の保険の宣伝がものすごく多いです。あれを見るたびに思うのですが、今、人間たちがお金を融通し合うということが全くなくなってしまったと。だから、例えば入院して、ちょっとお金が掛かると。そのときに、昔だったら兄弟から借りてくるとか、時には、親戚のちょっと羽振りのいい人がいて、その人に貸してもらうとか、あるいは友人から借りてくるといっても含めて、いよいよ困ったときには何かお金の調達手段があったという気がするのです。ところが、それが全くなくなってしまって、だから保険に入っているしかないという。これもまた、かなり冷たいお金の時代だなという気がするのです。

そうしてみると、今、私たちが親戚や親子、兄弟、あるいは友人、知人、そこから幾らお金を借りてくることができようかと考えてみると、私の場合でも、1、2 万円だったら友達に頭を下げて借りられるような気がしますが、少なくとも 100 万円単位でのお金は、たぶん不可能だろうという気がしてきます。つまり、誰も貸さないという。だから、いよいよそういうお金を調達しなければいけないという、やっぱり消費者金融に行くとか何かしないと、たぶん調達できないのではないかという気がしています。そうすると、考え様によってはわずか 100 万円ぐらいのお金が、友人、知人、兄弟、親戚等々から調達できない社会というのは、これはかなり冷たい社会だなという気がしてきます。別に借りたいと思っているわけではないけど、やはり困ったときには隣のうちに行ってお願いをすれば、ポンと 10 万 20 万出てくるといって、そういう社会の方がやっぱりはるかに温かいという気がします。

その点から言うと、私が半分住んでいる群馬県の上野村ですが、あそこはたぶん 100 万ぐらいのお金はすぐ集められるといいますか。後で散々な目に遭うかもしれませんが。取りあえず急にお金が必要になって、上野村というのは幸か不幸か銀行がありませんので、夜、急にお金が必要になって、隣の家から順番に回って事情を言って、「ちょっと悪いけど貸してくれ」と。銀行がない地域というのは、どこの家でも 10 万、20 万の現金が仏壇の下か何かにありますので、恐らく、みんなお金を貸してくれるといいますか。ですから、5 軒ぐらい回るとたぶん 100 万ぐらい集まってしまいます。ただし、「明日返すから」と言った以上は明日返さないと、後でやばいことになりますけども。取りあえずは、たぶん貸してくれるだろうという気がします。だけど、東京で夜、数軒回

っても、とてもじゃないけど1円も集まってこないという気がしています。だから、やっぱり今こういう社会というのは、私にはやはり異常な社会というふうに思った方がいいというか、これだけ温かさを失ったといいますか。結局、それは関係性を失ったと言ってもいいわけで、冒頭から申し上げているとおり、人間の本質に属するものを人間が捨てたというふうに言った方がいいのだろうという気がします。

地域通貨の持つ可能性

今、世界にはたくさんの地域通貨というものが発行されていて、日本でもたくさん出ることには出ているのです。残念ながら、日本で機能している地域通貨というのはあまり聞いたことがないです。発行して盛り上がりつつあるんだけど、そのうちにだんだんあまり使われないう通貨となっていくケースの方が非常に多いような気がします。

実は、私も上野村では20~30人、一緒にいろんなことをやっている仲間がいたりしています。そういう人たちとの集まりの中で、「ちょっと地域通貨を発行してみようか」という議論もたまにやるのです。ただ、地域通貨で何を回すのかと。そうすると、例えばちょっと畑の仕事を手伝ってもらったとか、いろんなことをしたときに地域通貨でお礼をすとか、それからあと、高齢者で車に乗れない人などがいますから、ちょっと買い物に連れて行ってあげたときに地域通貨でお礼をしてもらおうとか、そういう形で地域通貨を使う場所をつくってみたらどうだろうかという議論がよくあるのですが、やっていくと最後はどうなるかという、「そんなもん、別にお金がなくなつてやればいいじゃない」と言って終わりになるわけです。「そんなものでいちいちお礼だといってお金を出しているというのは、いくら地域通貨でも村らしくない」と、むしろそういう議論で終わって、一度も発行しようという話になったことがありません。

通常の商店などで地域通貨が回るようになれば別なんですけど、そこでも、実は必ずしも額面どおりやっているわけでもないのです。やはり村の商店というのは、そこで少し生活が大変な人がいればいろんなことでおまけをしていたり、足の自由に動かない人がいれば家まで届けてあげたりとか、いろんなことをやっているわけで、そういうことを全体の中で何となく帳尻を合わせているのが田舎の商店です。ですから、実はそこでは額面で取引はしているけども、実は額面プラスアルファ的なものを絶えず付け加えながらやっています。逆に言えば、プラスアルファをしなくていい人たちからは少し高めに売っているという言い方もできるんですけれども。それで、その人たちも少し高めだということを知っているんですけども、そういう形で地域社会が回っているんだからそれでいいではないかということで、むしろ地域で買い物しようみたいな雰囲気やっているわけです。だから、ここでは額面どおりの取引が一応なされているけども、絶えずそれを超越したものが付け加えられているといいますか。だから、そういうふうな形で回っている場合に、またそこにわざわざ地域通貨を発行しなくても、やるべきことはやっているんじゃないかということになって、結局要らないという話になってくると。

たぶん日本の地域通貨はそういう問題が絶えずあって、かつて極めて儀礼的にやってきたこととか、それから助け合いでやってきたことが絶えず地域社会の中に内蔵されていて、そういうものを別に本当に金額換算しなくてもいいのではないかと。

その点から言うとヨーロッパ社会というのは、比較的、人間の労働力を使っ

た場合には、お金を払うということが一般的だった。実は、私もフランスに行き始めたころに、最近も行っても観光客としか思えないような日々を過ごしているのですが、最初のころはまじめにいろんなことを調査しようとしていました。そうすると、私は哲学ですのでデータはあまり重要ではなく、人間たちがどういう思いで生きているのかといったようなことの方がずっと重要なのです。ですから、盛んにインタビューをしました。人からいろんな人を紹介してもらって、大学生とか、若い労働者とか、あるいは逆に60歳近い人だとか、いろんな人たちを紹介してもらって、一生懸命話を聞かせてもらうことをよくしました。そうすると、当然ながらお礼という問題が出てくるわけで、日本だったらお話を聞かせてもらって、別にそれをテレビで流すわけでもないし、どこかで発表するわけでもないという、菓子折りのようなものでも用意しておいて、帰りに「ありがとうございました」と置くとか、大体そんな感じかなという気がするのですが、向こうのルールもあるのでどういうお礼のし方をしたらいいのかと聞くと、「それはもうお金で」と言うのです。幾らぐらいかと聞いたら、「大体1時間話を聞いたら、時給幾らぐらいが相場だから大体これぐらい」と言うのです。そのときに向こうから言われたのは、「大体もうそれで社会が出来上がっているから、それ以上多く払わないでね」というのです。だから大体、学生さんに1時間聞いたら、アルバイト料としてはちょっといいアルバイトというぐらいです。だから普通の、例えばお店にアルバイトに行ったときの倍ぐらいとか、そんな感じなんですけど。もうちょっと大人の人に話を聞いたときには、それがさらに50%増しぐらいとか、そんな感じといたしますか。それで、「え、フランスでは普通そうなんですか？」と聞くと、「全然問題ありません。みんなそれをやっていますから」と言うのです。「その場合にはちゃんときれいに包んで、日本で言うと、のし袋に入れて出すみたいなの。何か、そこはルールがあるのですか」と聞いたら、「そんなの裸で渡せばいいです」と。「裸で渡したら、受け取るのですか？」、「みんな受け取るから大丈夫です」という、初めはそれにちょっとびっくりしたのですが。それで本当に、言われたままに、当時はまだフランでしたから、20フランとか30フランとかを用意して、大体2時間お話を聞いたらこれぐらいとか、1時間ならこれぐらいと。本当に、終わったときに財布から、「1時間だったな」とこんな感じで出して、「ありがとうございます」という、そんな感じでした。日本だったらむしろ、こんなことをやったら「失礼だ」と言って、逆に怒られてしまうといえますか。ですから、そのへんは社会の歴史の違いみたいなものがあって、むしろそういうことはもう「お金抜きだよ」みたいな、そういう感じの歴史をつくってきた日本と、あくまでそれは人の労働力を使ったという呼び方をして、そうである以上、労働力の対価を払うのは当然だというふうに考える社会といえますか、その違いですから、別にどっちがいいとか悪いとかいうわけじゃないんですけど。そういう点では、実にいろんなものを契約に従って支払うというか、それが出来上がっている社会です。ですから、そういう社会だから地域通貨を発行して、じゃあ人間の労働力を使ったという場合、その賃金に当たる部分を仲間の中では地域通貨で出すとか、そういうことが割にやりやすいというか、だから機能しやすいわけですね。ところが日本は、その部分はちゃんと関係のある仲間の世界であればあるほど、「お金なんか要らないよ」という雰囲気になっているので、なかなか地域通貨を作ってもうまくいかないというのが日本の現実でもあります。

ただ、議論するのは意義があると思っていて、つまりだんだんそうやってみんな助け合っていくことが低下してきていますから、むしろ地域通貨の議論

をすることによって、どういう部分は地域通貨で払ったらいいかを議論すると。そうすると、最終的には「地域通貨なしでいこう」ということになるんだけど、そういうことで協力し合うことが最近ちょっと薄くなってきたねということに気が付いてくるので、もう一遍そこらへんをきちっとつくり直していこうと。そういう方向では機能するといいますか、役割を果たすという感じはします。

ゲゼルの経済学

～すべての商品は劣化する～

実は、地域通貨的な考え方の出発点にあったのは、ゲゼルという人の経済学だったのです。それでゲゼルという人は奇妙な経済学を作った人で、誰からも相手にされない経済学者と言ってもいいよう

な人だと、取りあえず思っていただけで結構です。

彼はどういう経済学を考えたかという、すべての商品は時間とともに、あくまで経済的価値ですけど、それが劣化していくと。例えば衣服でも、買ったときに1万円でも、たとえ着なくても半年間置いておいただけで、それはもう1万円では売れなくなってしまうわけです。たぶん半値以下になってしまうといいますか。だから、すべてのものは時間とともに商品価値を劣化させていく、ということでした。もちろんそれは例外もあるわけで、例えば絵画、骨とうのようなものといった一部のものについては、時間とともに逆に商品価値が上がってしまうということが起きますけど、一般的な商品で言えば、時間とともに価値は低下すると。貨幣というものは、その商品を取引するときの媒介的な手段であると。だから、媒介的な手段に過ぎないのに、貨幣は時間とともに価値を劣化させないと。それどころか、貨幣というのは銀行に預けておけば増殖してしまうというのです。それは今の日本の場合、銀行に預けてもほとんど増殖しませんけど、それでも年間1円でも2円でも、やっぱり増殖するわけです。これが経済の持っている根本的な問題点だというのがゲゼルの経済学だったのです。つまり、商品は価値を劣化させるのに、その仲介をやっている貨幣は逆に増殖をしてしまうというのです。だからこの問題点が結局、貨幣中心の社会をつくってしまうと。それで、貨幣が王様になってしまう。結局、最終的には貨幣のために人間が働いて、貨幣に支配されるという、そういう時代をつくってしまった。

そこからゲゼルは革命的な解決策を提案したわけで、劣化する貨幣を作ればいいというふうに主張したわけです。だから簡単に言うと、今ポケットに1,000円入っていても、ひと月ポケットに入れておくと900円になってしまうと。3カ月ポケットに入れておくと700円になってしまうと、10カ月入れておくとただになってしまうという、そういう貨幣です。つまりそういう貨幣を作っていけば、商品も劣化するけど仲介している貨幣も劣化するから、これで平等になるというのです。そういう経済学を構想したわけです。しかし、貨幣が劣化してしまうと通常の経済学は大変困るわけで、ですから「奇妙な経済学」というものをつくった人だったわけです。

ところが、これが1930年ごろの世界恐慌の中で、実は脚光を浴びてしまうのです。オーストリアのある町で、そこも大変な大不況で、町が、行政が地域通貨を発行するのです。行政が地域通貨を発行したときに、例えば役場の職員の給与の50%を地域通貨で出すということをやりました。それからまた、地域のいろんな事業所に協力をお願いして、ともかく賃金の50%は地域通貨で発行してくれということをお願いしたわけです。それに対して、みんながよく協力を

したと。そのために、地域通貨がいきなり町中に出回るようになりました。この地域通貨が「裏書紙幣」とも言うし、それから「スタンプ紙幣」とも言うのですが、後ろにマス目みたいなものがあって、いつ使われたのかの日にとサインが出るのです。それでひと月で1%価値が低下するのですが、だから1年間持っているとしたら12%価値が低下するわけです。ただ、実際にはそれを使うときに価値を復活させて使わなければいけないのです。そのために、いろんなところで「スタンプ」という切手みたいなものを売っていて、例えば1,000円でひと月使わずに持っていたとしたら990円になってしまった。そうすると10円の切手を張って、1,000円に復活させて使うわけです。そういう通貨を作ったわけです。そうしましたら、当然ながら長く持っていれば持っているほどお金が価値を失っていくわけですから、ともかく地域通貨をもらったなら早く使ってしまうということが起こってきます。そのことによって地域経済が復活してきて、不況を乗り切ることができたという出来事があったわけです。

それを見ていた世界中のいろんな地域で、これは面白いやり方だということで、3千ぐらいの地域通貨が発行されるのです。それがすべてゲゼル理論に従っていて、劣化する通貨という通貨になっていたわけです。そうするとどこでもうまく行ってしまって、つまりお金を持っていると損だということです。実は銀行に預けていても、ひと月預けると1%低下するのです。ですから、銀行なんか1年間お金を預けておくと12%減ってしまうわけです。さらに、8年間預けるとなくなってしまうわけです。ですから、ともかく物に変えてしまわないと損だということなのです。ところが、それがかなりうまくいったために、中央銀行が通貨のコントロール機能を失うことを恐れて、今度は一斉に禁止されていくのです。それで、短期間に終わってしまったというのです。ただ、今はまだ発行してもいいわけで、ですから劣化する通貨をいくら発行しても構わない。ただし、劣化する通貨を発行する以上条件はあるわけで、それは今日ここにいらっしゃる方、組合で言えば自治労系の方が多いと思うので、そうすると賃金の50%は地域通貨が発行するという。高知市でしか使えない通貨とか、それで発行するということをやりますと、みんなは必死になって使うということになるわけですが。どうしても社会がこういう社会ですから、100%地域通貨にされてしまうと非常に苦しいことになって、息子への仕送りはどうしたらいいんだとかそういう問題が発生しますから、まあせいぜい5割なんですけど。だから、役場が率先して賃金を半分地域通貨にするとかということをしていないと実はこれ機能しない仕組みなんですけども、これをやったときには実はうまくいったといえますか。

実は、もう少しこれは実験を続けてほしかったのです。なぜかという、例えば今私たちが劣化する通貨というのを手に入れたらどうするかですが、取りあえずは、もうちょっと買っておいても困らないものを買おうということになると思います。そうすると、まあ、お米10キロぐらい買っておこうとか、それからしょうゆをもう1瓶買おうとか、そういうものをたぶん買おうと思います。だけどこれは限界があるわけで、しょうゆを1万本買うというわけにもいかないわけです。10本も買ったなら、もういいやということにどうしてもなります。そうすると次にはどうするかというと、やはり劣化しないものを買おうということになってくる。例えば、下着なんかだと10年分、20年分買っておいてもまあ大丈夫だろうと。じゃあ、そういうものを買おうとか。それから洋服なんかでも、買っておこうということになってくる。ところがそうすると、10年後に着る洋服を買うということになると、あんまり流行に合わせてしまうと10

年後は着られないとか、それから10年たったら自分も当然10歳年を取るわけですから、少々年齢が変動しても着られるようなものを買っておかないと、恥ずかしいことになるという可能性が出てくるわけです。だからそこから、本当にいいものは何なのかということが始まっていきます。

しかし、それだけで地域通貨を使い切っていくのもなかなか大変だということになってくると、今度は例えばいい家具を買おうとか、100年ぐらい使える家具を買おうとか、あるいは家を建てるにしても、100年ぐらい使える家を造ろうとか。とにかくお金を置いてお



いてもしょうがないわけですから、そういうことをする人たちが出てくる。そうすると今度は、例えば100年使える家を造ったり、100年使える家具を買う以上は、100年間使う仕組みをつくらなければもったいないわけで。だからそうすると、例えば100年使える家具を買ってきたら、やっぱりそれを子どもが受け継いでくれるとか、孫も受け継いでくれるとか、3代ぐらい使ってくれるからそれに意義があるわけで、自分が死んだらすぐに燃やされてしまうようなものだったら意味がないわけです。それは、自分の家に子どもがいなかったり受け継いでもらえないということだったら、今度は地域社会の中で「あれはあなたが受け取って使ってね」という人をつくっていくとか。だから、そういう仕組みがないと意味がないわけで、家も同じで、100年使える家を造った以上は、子ども、孫がちゃんと受け継いでくれるか、あるいはそうじゃなかったら、地域社会の中で誰かが着実に使ってくれるという仕組みをつくらなければいけないわけです。結局、本当に価値があるものというのはどうやって生まれていくのかという。だから初めは価値あるものが、腐らないものとか、10年たっても使えるものという、そういう物の価値なんだけれども、もうちょっと後では、どういう関係ができている場合、どういう仕組みができていたら、実は価値あるものというのが生まれるのかという、それが出てくるわけです。ですから、そこらへんまで実験が続けば実におもしろい話になっていったのですが、そこに至る前につぶれてしまったという歴史がこのときはありました。

ですからこの時期にゲゼルという人は脚光を浴びて、それから以降、地域通貨を考えている人たちというのは絶えずゲゼルには関心があると。日本でもこんな分厚い翻訳書が1冊あります。

ただ、実はこのゲゼルという名前を使った人にケインズがいたのです。ケインズというのは、もう「私は、あらゆる経済システムの中で資本主義ほど優れている経済システムを知らない」というふうに公言していた人ですし、だから一面では、資本主義の守護神みたいな人というふうに言ってもいいと思います。30年ぐらい前までの、つまり市場原理主義が出てくる前の世界の経済政策を支配した人というふうに言ってもいい人です。その人が晩年に言っていたのは、彼はマルクス経済学も勉強していた人です。ただ、マルクス経済学に同意しなかっただけなんですけども。当時、まだ社会主義勢力というのはかなり力を持っていました。そういう中で、彼が将来やっぱり重要な経済学としてあり続け

るものとして、やはりマルクス経済学というのは重要な経済学であり続けるだろうというようなことを言っています。ただし彼は、重要な経済学であり続けるだろうけど、私はあの経済学は支持しないという、その後の一文はちゃんと付いているんですけど。ただその後で、恐らく歴史の中では世界で最も重要な経済学にこれからなっていくのはゲゼル経済学だろうというふうにケインズが言っていたというのです。それは、ケインズというのは資本主義を支持した経済学者だったんだけど、彼もやはり資本主義の弱点というのをよく知っていて、それは、資本主義の経済というのは貨幣によって展開する経済だと。しかも、額面で展開する経済です。まさに、さっきの言葉のように「冷たいお金」で展開する経済なわけです。そのために、どうしても人間たちの中に貨幣愛が出てくる。つまり、その貨幣愛の登場が人間社会を退廃化させていくと。だから、いずれ資本主義は自滅して、崩壊してしまうというふうに考えていたといえます。だから、貨幣愛なき社会をどうつくるかというのは彼のテーマだったのです。ただし、その方法が見つからないと。というところで、彼はインフレなき社会、同時にデフレなき社会。つまり、それは貨幣価値が安定している社会を考えたといえます。貨幣価値が不安定になってくると、まじめな生産行為よりも投機的な活動をした方がもうかる社会ができてしまう。そうすると、まさに貨幣愛が丸出しで世界を乱舞した時代が生まれると。そうすると、資本主義の自滅が早まるというのです。ですから、それを押しとどめるために貨幣価値を安定化させる。ケインズ経済学はそこにあったのです。だけど、彼は貨幣価値を安定化させて資本主義を延命させていっても、最後は貨幣愛の社会として自滅していくだろうということを考えていました。

それで、ケインズというのは革命直後のソ連を訪問して、ちょっと調査をやっているのです。帰ってきて、イギリスで報告しているのですが、彼は「この愚鈍な経済学は必ず破滅する」と言っているわけで、つまりソ連でやっている実験は全然駄目だと。こんな非効率なことをやっていたら、必ず破滅する。だから可能性はないと、そういう感じでむしろ批判するわけです。ところが、にもかかわらず彼は、当時、列強はソ連に干渉戦争を仕掛けていました。日本もシベリアに出兵していたりしてやっていた時代です。そのときに、ソ連を抑え込もうとするあらゆる干渉に対して反対するというふうに言っているわけです。それどころか、むしろソ連社会を援助・支援してもいいんだと。それで、ソ連の今やろうとしている実験について、「私は絶対あんなもの駄目だと思っているけれども、温かく見守って、場合によったら支援をするぐらいの気持ちでいいんだ。だから、それをつぶそうという干渉を仕掛けるなんていうのはとんでもない」というふうに言ったと。それはなぜそう言ったのかというと、「私はあのソ連がやろうとしているのは駄目だと思うけれども、でも、ソ連の中で芽生えていることがある。それは貨幣愛なき社会という芽生えが革命直後のソ連に感じられる」それで、「私は、いずれこれはソ連の中でも貨幣社会になってしまうだろうと思っている。けども、貨幣愛なき社会の芽がちょっとでもある以上、私はそれに懸けたい」と言っているわけで、彼はその可能性は100万分の1ぐらいしかないと言っています。だけど、その100万分の1でもいいから貨幣愛なき社会の可能性があったら、むしろそれをみんな見守って大事にしていきたいと。それこそ人類が探さなければいけないものだったというふうに言っていたというの

です。だから、非常に屈折したソ連報告をケインズはやっているわけです。

その後、戦後はドル体制の構築に反対した人でもあったし、そして同時に、将来、世界はゲゼルの名前を一番大事な経済学者として記憶する時代が来るだろうというふうに言ったといひます。だからそれもまた、まさにゲゼル経済学がもしできれば貨幣愛なき社会になっていくわけで、そういうことを言った人でもあったわけです。

結局、ここでゲゼルの経済学をすぐ実行に移すかどうかは別問題としまして、さっき言ったように関係の中でお金を使っていくというのは、別に額面が劣化するわけではないけれど、しかし人間たちは額面に依存しない使い方をするというのです。だから、額面を超えた使い方をするという、そういう社会が実は一方にもあるということなんです。それにもかかわらず、資本主義の経済がまさに額面どおりの市場経済をつくり出して、そしてそこでゲゼルが問題視したようなことが起きてきたということです。

ですから、このゲゼルが提起したような劣化する貨幣という考え方も非常に面白いし、できるのだったらやってもいいなという気さえます。もう1つの課題としてはやはり、額面を超越したお金の使い方。それを可能にしていくような関係し合う世界をどうつくるかということです。これが、実は貨幣問題としてはかなり大きい課題なんだという気がします。

人間同士の関係し合う

「ローカルな世界」とは

私が冒頭言ったように、人間はいろんな関係をつくりながら生きていくという本質を持っていた。だから、そういう中で生きていくならば、やっぱり貨幣というのは絶えず額面を超越されるという、そういう使い方が行われるということだと思ふのです。しかし、戦後

の日本みたいに、多様な関係が次々に失われていって、自然との関係も失われ、人間同士の関係も失われという社会を形成してくると、本当に額面だけのお金が社会を支配してしまうような、そういう時代が形成されていきます。だから、その関係し合う世界というものを指して、私自身は「ローカルな世界」とか「ローカル世界」と言っているわけです。本来、ローカルというのは地域的なローカルを指す言葉なんですけれど、今、私たちが「ローカル」という言葉を使う場合には、ある関係によって出来上がっている世界。だから、かつては地域というのはある関係によって出来上がっていた。しかし、今みたいに人間たちが移動性が高い生き方をしているという時代になってくると、必ずしも地域に限定しなくてもという気がするんですけど、あるしっかりした関係でつくられている世界です。そういうものができてくると、その中ではまさに額面を超越した使い方をするというのができてくるわけです。

実は、私もいろんなところに首を突っ込んでいるところがあって、そのたびに何をやっているか分からなくなっているところもあるんですけども。去年5月に、私が首謀者ではなく協力者ぐらいですけど、東京の日比谷に2軒目のレストランを出したのです。それは我々のグループで出しました。1軒目は4年前に出していて、1軒目は「とかちの・・・」という名前なので、後でホームページで検索してもらおうと出てきますけども。2軒目、去年は「にっぽんの・・・」というのを出したのです。「とかちの・・・」というのは帯広地域の人

たちが食材提供をされていて、そこで帯広の料理というか、十勝の料理という形で出している。ただ一部、それ以外から入ってきているものもありますけど。というのは、この季節、青い野菜は十勝からは入ってこないのです。ちょっと別の所から入っています。あとアルコール関係は、山梨の勝沼から入っているものが多いです。十勝もワインを出しているんですけど、まだいまひとつだなという感じが少しあったりするといいますか。

勝沼の方も、実は勝沼の醸造家たちが NPO をつくっていて、それでその人たちから入れているのですが、非常にいいワインを作っています。だから、十勝の食材と勝沼のワインと。若干補充する形でほかのが入るけれども、それも生産者がはっきりしているものだけです。場所が、日比谷の帝国劇場がある地下1階なので、大変高い所に出しているんですけど、仕事が終わってからちょっと来られる場所という、たまり場という意味もありますから。それから、そこで食事をしながらいろんな交流をしていくという場所でもあるし、あと、仲間に当たる人が地方から出てきたときに、比較的ぎりぎりまでいることができる場所ということもあって、日比谷でやっています。

今度、「にっぽんの・・・」になったのは、「とかちの・・・」は20席ぐらいの店なんですけども、「にっぽんの・・・」は50席ぐらいになっていて、同じビルの地下1階で、同じフロアです。7カ所の農民とか漁民とかが食材提供しているので、そのために名前が「にっぽんの・・・」になっているんですけども。これは造るときに、実は「とかちの・・・」を造ったときは僕はまだ知らなかった、あるいはそのグループと付き合ったころにオープンしたと言った方がいいのですが。だからこれには関与していないのです。ただ、「にっぽんの・・・」のときには、「じゃあ、ちょっと協力できることは協力してもいいや」という感じでやったのです。「にっぽんの・・・」のときの開店資金は約5千万円掛かっているんです。それは、大家さんが三菱地所という日本最大の大家さんだということもあるんですけども、また日比谷の一等地に出していますので、大変お金が掛かっています。

それで、5千万円のお金をどうしたかということなんですけども、約2千万円弱が銀行からの出資です。これも、それに協力するという銀行から社債を発行する形で、出資の形を取ってもらっています。融資だと、借金になってしまいますから返さなければいけないんですけど。そういうふうな一種のこれもソーシャルビジネスと言ってもいいやり方なので、そこに少し実験的に協力するということで、2つの銀行が社債で2千万弱ぐらいを出資してくれています。残り3千万円なんですけど、それはみんなの出資です。だから、僕も少し出したという感じです。よく集まったなと思うんですけども、出資者は50人くらいいるんじゃないかなと思います。

それで、食材を提供している農民の人とか、そういう人も出資しているんですけど、ただ、農民からあまり多額の出資をしてもらうというのは大変心苦しい時代なので、それは出資してくださるといっても、つながりで気持ちだけという形にしているので、恐らく出資できる人が出すというやり方です。そのときも我々が言っていたのは、「額面にとらわれては駄目だ」と。だから、「あるやつは出せばよい」と。「ないやつはちょっと出せばよい」と。それで平等であるというわけです。ともかく出資しましても、理由のいかんを問わず出資金の返還はないというのです。それで配当もないと。ただ、5%相当の食事券をくれるということなんです。これも1年たったら終わりです

ので、永遠には使えませんということなんですけども。事業はうまくいっているのに何らかの事情で解散をするということが発生したときのみ、出資金をどうするかについて相談をしますというふうになっています。それ以外は、もし儲かったら、それはまた別の展開で使いましょうということで、配当はしませんということです。だから、このへんもあんまり額面に汲々になってしまうと、我々自身が窮屈でたまらない。だから、お金というのはもう額面無視で使おうという。ただ、そんなことを言っても実際には、これからうちの子どもが大学に行くとかいろいろなことがあるから、ある程度額面を頭に置かざるを得ないんだけど、我々の考え方としては金融資産というか簡単に言えば貯金が幾らかあったら、その 20%はみんなのものを預かっていると考えます。それで、預かっているんだから、何かうまいことをやろうという話になったときに、その預かっているものを返すということです。100%おれの金だとなってしまうと、逆に気分も含めて窮屈になってしまって、ちっとも幸せになれないと。だから、2割ぐらいはみんなのものを預かっているんだから、これはもうおおらかに、額面関係なく使うよという、そういうお金を持とうという。

ただし、これも 20%と言っているけど、きっちり 20%じゃなくていいわけです。例えば、自分の場合そんなわけにいかないという人も当然出てきますし、それから人によっては逆に、半分ぐらいでいいよという人もいるかもしれません。だから、別に 2割という絶対的な数字ではないんですけど、つまり額面にとらわれないお金の部分を少し持たないと、逆に我々だんだん圧迫されてしまう。

助け合える社会

「ローカルな世界」の構築を

実は、さっきから言っているとおりそういう使い方をしているのです。さっき、みんなして飲み屋に行って、「じゃあ、おれ少したくさん出すから」と。これ、みんなの預かり金を返していくような使い方

をしているわけです。関係の中ではそれが使えるわけですから、それもそういう関係をつくっているから、じゃあ預かり金は使うよという使い方ができるのです。だから、我々自身が少しお金から自由になるという使い方を一部分やっていこうと。そういうことをしていかないと、本当に冷たいお金の世界に飲み込まれてしまって、ちょっと温かいお金の世界みたいな、言葉は矛盾していますが、お金に使用価値を付けるといいますか、そういう使い方をしてみたいと。それは、どういう関係の中で使うのかに尽きてくると。

だから、それが地域ということを考えていくなれば、地域にどういう関係が出来上がったときに額面にとらわれないお金の使い方ができるのかということだと思ふのです。それは例えば共同体という言葉を使った場合に、江戸時代を見ると、農村社会にももちろん農村共同体があった。それから、たぶんこの高知もそうでしょうけど、都市にもまた都市の共同体がそれなりにできていた。そのときに、農村共同体の助け合いと都市の助け合いというのを見ると、やはり違いがあるのです。

農村共同体の助け合いというのは、1つは生産物の提供でやっているのです。困った人に例えばお米 1俵あげるなどして助け合うと。

それから、もう 1つは労働力の提供でやっている。というのは、みんなが

田植えができたり、みんなが同じことをできるわけです。だから、じゃあ代わりにみんなして田植えをしてあげようとか、稲刈りをしてあげようとか。そういう形で助け合っているわけです。

ところが都市になってくると、必ずしも生産物での助け合いができなくなってしまいます。大体何も生産していないようなサービス業みたいなものも当然ながら都市というのはたくさん発生してくるわけで、そうすると、困っている人を助ける生産物がないということも起きてしまうし、それから、かんざしを作っているからかんざしをあげる言っても、病気で臥せっている人がかんざしをもらっても困るという場合が出てくるわけです。

それからもう1つ、労働力の提供がうまくいかないのです。というのは、仕事がばらばらになってきてしまいますから。夕飯を作ったり掃除をしてあげるなどということはできますけど、例えば大工さんが病気になってしまったから、代わりにじゃあ僕が最後、家の仕上げはおれが行って造ってやるということではできないわけです。大工仲間だったらできるんだけど、その場合でも大工さんたちはみんな契約して、いつまでにやるか仕事をやっていると、自分の仕事を放り出して助けに行くことができなかつたりするわけです。

ですから、労働力の提供が限定的になってしまうことと、生産物の提供で助けるのも、できたとしても極めて限定的と。そうなってくるとどうするかというと、実はお金を貸すというやり方を取っているわけです。だから、仲間が困ったらお金を融通してあげる。それでお金を貸してあげて、元気になったら返してね、みたいな感じで。その場合、あくまでも貸してあげるのです。それで、あげてしまおうとかえって負担を与える。だから貸してあげる。時には利子まで取るという約束をする。そうやって、経済活動として助け合っていく。

ただし当時、そういう江戸の町の人たちというのは、「講（こう）」という形でグループを組んではいろんな寺社とか山などにつながっているという生き方をしていたのです。江戸の町だと、富士山とつながっている富士講がたくさんあったり、伊勢講があったり、ほかにもいっぱいあるのですが。そういうふうな信仰と結びながらグループをつくっているものなんかだと、みんなのお金を集めて借金させてあげる。それで、利子も取ると約束をする。だけど、困っているわけですから結局返せない。あるいは長く返せないと、返そうと思ってもだんだん負担になってくると。そうすると、みんなの代わりに山に行ってお参りをしたり、伊勢に行ってお参りをしたりする。そして、みんなのお札を持って帰ってくると。それは代参（だいさん）、代わりに参るというのですが、ありがたいことをしてもらったということで借金はちやらという、そういう仕組みを作るわけです。ですから、江戸時代というのは都市の助け合いで盛んにお金を使っているわけです。それはただし結び合った世界、関係の世界で使っているということです。

だから、もう一遍僕らはそういうことから学び直しながら、今のよう結局裸の貨幣があまりにも暴力としか言えないような形で世界を支配していくとどうですか。支配した揚げ句に、あのリーマン・ショックのように自滅もするという。今、世界中が財政出動して何とか支えているような感じになっているけど、またいつ爆発するか分からないという、そういう状況がずっと続いています。しかも、僕が非常に頭にきたのは、例えばリーマン・シ

ショックが起きた。そうすると、投機的な活動をしている人たちが参ってしまったら、例えば私なんか、株も一株も持っていないし、いかなる債券も持っていないんですが、であれば勝手に踊ったやつが勝手に没落したということで、高みの見物でいいわけです。ところが、事態はそういう感じではなくて、踊っていた連中は結構逃げ切っているわけです。この後 100 億円儲けようと思ったけど、20 億で終わってしまったとか 50 億で終わってしまったとか、それで計算違いという人はいるけれど、結構逃げてしまっているわけです。ところが、株なんか一株も持っていないような派遣労働者とか、そういうところに一気にしわ寄せが来て、派遣切りなんかが始まるわけです。まさに資本主義というのはそういう形で問題が起きてしまうわけですが、原因を作った連中が逃げ切っていて、全く関係ない、まじめに派遣やっているような人が年末に行く所がないというような、そういう社会をつくってしまっているわけです。そうすると、高みの見物をしているわけにはいかない。つまり、自滅するときには本人だけが自滅してくれればいいんだけど、周りに自滅を押し付けて、自分は自滅しないという、まさにこういう社会になっています。

こういう社会はやはり、いくらなんでも終わりにしなければいけないわけで、それはほかの課題もあるでしょうけど、私たちの発想としてはもう一遍、温かいお金とか関係の中で使うお金とか、あるいは関係とともにあるローカル世界とか、そういうものをいかに大事にしていくのかということをしていかないといけないし、僕はそれをやっていかないと、私たちの人間の本质が取り戻せないという気がするのです。最初に言ったとおり、人間はむしろ多様な関係をつくることによって人間になったのです。そこのところをもう一遍、そういう形を通して取り戻していく必要性があるのではないかという気がしています。

予定より 10 分ちょっと余分になってしまいましたけど、これで一応締めたいと思います。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

(司会)

ありがとうございました。

お金と、それをめぐる人と人との関係性の話に沿って、戦後の特にこの約 30 年間で私たちが何を失ってきたのか、それをどう回復していくのかというようなことで、いろいろと考えさせられるお話だったと思います。

せっかくの機会ですから、まだ時間に若干余裕がございますので、ご質問等あればお受けしたいと思います。

恐れ入ります。挙手の上、お名前だけおっしゃって、ご発言の方よろしくお願ひしたいと思います。

どなたかございませんでしょうか。

どうぞ。

質疑

(参加者)

ありがとうございました。大野と言います。

1つは、最初の導入部分でおっしゃられたことなんですけれど。

フランスの事例として、失業者がいる場合に残業拒否というのは労働者の文化だというような話がありました。日本の場合、昨年1年間でもう350万を超えているとか、この間報道されました、1年間ずっと失業中が120万を超えているという、そういう状況の中でも一方で、長時間労働で過労死とか、精神疾患で過労の種となっている。残業拒否という発想が全然出てこない。フランスの場合は残業しなくても、例えば所定労働時間で少なくとも生活できるような社会の仕組みというのがあるのかどうか。残業拒否、日本の場合はもう残業が生活費に組み込まれている状況があるわけなので、そのところフランスではどうなのか。社会の仕組み、賃金の体系も含めて、そういうのは残業しなくても労働者が生活できるような生活の在り方があるのかということが1つ。

それともう1点、裸の冷たいお金が行き渡っていて、額面にとらわれないお金の使い方と言いますけれど。一面ではそういう関係を、多様な関係という人間が関係をつくる、その難しさが非常にあるのかなと。そういう部分がどういうふうな形で、関係そのもののつくり方。お金の使い方であると同時に、その関係のつくり方といいますかね。地域であれ、あるいは労働者であれば、労働組合というような形での共同体の中でのそういう関係のつくり方というのはどういうふうに考えたらいいのかなというふうにちょっと思いましたので、もしよろしかったら教えてください。

(内山さん)

私が、1回目だったか2回目だったかそのへんですけどフランスに行ったときに、ちょうどミッテランが大統領選挙で当選したときだったのです。別に大統領選挙を見に行っただけじゃないんですけど、行ったら大統領選挙をやっていて当選をしたといいますか。

そのときに、つまり社会党系の初の大統領ということだったわけですが、テレビを見ていてびっくりしたことがあって、当選した日の夜ぐらいだったですね。フランスの場合は大統領制ですから、大統領権限でできることがあるのです。議会なんか一切通さずに大統領権限でやってしまうというのがあって。それは選挙公約だったんですけど、最低賃金の引き上げだったのです。当選したそのときに30%ぐらいの賃金引き上げを大統領命令で出しました。これはもう事実上の法律になってしまいますから。これは争点の1つだったのです。ミッテラン側は賃金引き上げを要求したと言っていたし、そんなことをやったらフランスの資本主義がつぶれる、という保守側の議論がずっとあったんですけど、その日の晩に公約実現をやったのにはびっくりしたといいますか。ただ、それでもフランスは別につぶれなかったわけですが。

そのときにもう1つ驚いたのは、労働者の賃金の低さでもあったのです。フランスの場合には、その最低賃金で働いている人たちがフランスの労働者人口ですとか、さっき言ったように階級社会がはっきりしているの、労働

者の人たちというのは数で言えば圧倒的多数派ですが。労働者の人たちで、最低賃金の賃金を受けている人が 60%なんです。ですから、その最低賃金 3 割引き上げというのは 6 割の人が 3 割上がってしまうわけで、大変な大賃上げだったわけです。

その後、フランと円とかユーロと円などのレートの問題があるので一概には言えないのですが、例えば東京とパリを比較すると、物価レベルは大体似たりよったりと思ってもらえればいいと。少し東京が高いときもあるし、逆に、ちょっとパリが高いときもあります。それはレートの違いと思ってもらえればいいけど、大体似たりよったりと思ってもらえばいい。それで、じゃあパリ辺りで働いている労働者たちは賃金がどのくらいかということ、向こうは同一労働同一賃金ですから、同じ仕事をやったら 20 歳も 60 歳も同じ賃金になるので、職種別賃金と思ってもらえばいいです。大体労働者の賃金というのは、今日でも月 15 万ぐらいです。ですから、大体夫婦で働いていまずから、合わせると 30 万ぐらいになるということです。これは、パリの暮らしとしては大変です。というのは、あそこはアパート代が大変高くて、家賃に 10 万ぐらい払っている人が結構いるといいますか。ですから、そうすると残り 20 万ということになってきて、そこからまた税金や社会保障料などが抜かれていくわけですから、結構大変なんです。

という点で、当時向こうの生活を見ていて、非常に労働者は質素なわけです。僕はそのときに、いずれ日本は賃金が下がると思っていたのですが、それは、賃金を下げると言ったわけじゃないんですけども、やはり世界がこういう賃金レベルで経済活動が展開している以上、日本の賃金は維持できなくなるという、資本主義のままである以上という意味で、日本の賃金はいずれ下がってくるだろうと思いました。



ただ、それにもかかわらず何とか生活ができるという一面もあるわけです。それはなぜかということ、まず小学校から大学まで、教育費は一切ゼロであるということです。だから途中で、向こうの場合塾はあんまりないけれども、家庭教師をつけるということがありますが。そういうことをしない限り、別に大学までお金は掛からないというふうに思ってもらえればいいと。それから地方から大学に出てきたりして、フランスというのは一種の入学の統一テストみたいなものがあって、それに受かるといろんなところに振り分けられてしまうわけです。だから、大体居住地がある程度考慮はされるんですけども、全国試験で合格すると、例えば、高知市に住んでいる人が第一志望は高知大学であるとか、第二志望はどこそこであるとかをやるんですけど、高知大学がいっぱいになってしまうと鳥取大学に行けと言うかもしれないし、北海道大学に行けと言うかもしれない。つまり、大学は全部国立しかありませんので、どこかに回されてしまうわけです。そうすると、当然ながらいくら

教育費はただでも、生活費は仕送らなければいけないくなるんだけど、そのへんも大体どこの大学も寮を持っていて、寮に入ると食事を全部取っても月2万ぐらいで済むようになっていきますから、だから実は教育費が全く掛からないというのがあったりします。

それから、健康保険料は日本より高いかなという感じがしますが、ただ健康保険料というのは、実は医療に支払った総額で計算しなければ駄目なのです。だから、日本の場合には例えば3割自己負担になると。そうすると、保険料に例えば月2万円払ったとして、ところが病気になったら、そこで自己負担分で合計3万円使ったと。そうすると、月に5万円使っているという計算になるわけです。それに対して、月3万円払っていても、病院に行ったら1万円で済んだということになると。そうすると4万円で済むわけです。だから、あくまで保険料分だけ要ってはいけないので、いろんな病気を想定して総額で幾ら使うかということで本当は計算しなければいけないんですけども。それでいくと、フランスの方が総額は低いです。

それで、大体最低賃金ぐらいになってくると、保険料が非常に安いですから、あまりお金のことを心配しないで病気になれるというのは変な言い方ですけど、そういうことがあるとか。そういうあたりで、かなりいろんなものがあるというふうに思ってもらえばいいということです。ですから、生活は何とかかなりますよということには言えるんですけど、ぜいたくはできませんという感じです。

当時、随分僕も労働者たちにインタビューして聞いていたんですけど、「上がるのも一緒、下がるのも一緒」とよくみんなが言っていて、だから、上がるときには闘争で勝ったときだと。そのときはみんな上がるんだと。闘争で負けるとみんな下がるんだと。だから、一人だけが上がったり下がったりするのは労働者らしくないと。それをやってはいけないということをよく言っていました。

だから、日本の場合には一人だけ上がっていく社会をつくってしまっているからいけないといえますか、あまり大差はないんだけど、一人だけ上がっていくとその差が1,000円でも気になってくるわけで、そこらへんの問題点がある。ただしそれは、向こうの場合には階級社会というものがそれを維持させたといえますか。だからそういうこともあるわけで、本当にこのへんをどう考えるかというのはありますけど、決して労働者の生活は楽ではありません。ただし、いろんな整備によって子どもを大学に入れたりすることは可能ですと、そういう仕組みにはなっているということです。

だから、向こうの労働者というのも結構情報を持っていますので、「日本の労働者はすごいんだってね」という話を随分聞きました。つまり、「我々の何倍も給料も取ってるんだってね」と言うのです。「だから、フランスまで遊びに来られるんだってね」という話をよく聞いたといえますか。

それで、向こうで労働者の人から声を掛けられると、よく「日本の労働者ですか」と聞かれるわけです。それで「違います」とか「労働者ではありません」とか言うのと、「じゃあ、仲間じゃない」というので冷たい態度になるので、そういう質問をされたら「うん、労働者です」と言わないと友達になってくれません。ある時パリに行ったら、以前にも顔が合った人がいて、「また来たの？よく来たね」と言うのです。私は、彼に日本の労働者だと言ってありますから「よくそんなお金があるね」と言うから、「最近、飛行機代が

安いから割に気軽に来られるようになったんだ」と。「往復幾らなの?」、「最近、エコノミーだと12万ぐらいでも来られるから」と。そしたら彼の顔がだんだん暗くなってきて、「日本の労働者にとっては12万円は安いのか。気軽に使えるのか。俺のひと月分の月給とほとんど同じだぜ」と言われて。実際にはそういうことです。ただ、だからこそまた助け合ってきたという。ただ最近かなり崩れてきたということは確かです。

もう1つ、関係をつくるという方なんですけど。やはり、他人のために生きるというのがあまりにもなくなってしまったということだと思っんです。戦後の教育、家庭内教育も含めて、僕は大変な間違いを犯したと思っているのは、子どもたちに「自分のために生きなさい」という教育をしたということです。自分のために生きるということになると、実は見失うのです。だって、自分のためとはどういうことかよく分からないでしょう。そうじゃなくて「他人のために生きなさい」という教育をしなければいけなかったわけで、他人のために生きてこそ、自分のためにも人がやってくれるわけです。自分のために生きると言われたら、それはお金をためることなのか、それとも偉くなることなのか、人をけ落とすことなのか、よく分からないわけです。だから、実は「自分のために生きなさい」と言われたときに、子どもたちは方向性を見失うと思っています。むしろ、それだったら「他人のために生きなさい」と言うべきだったと。それから「自分を大事にきなさい」と言ったということも大失敗で、「自分なんか大事にしないでいいから、他人を大事にきなさい」と言うべきでした。他人を大事にすれば、逆に言えば他人からも大事にしてもらえるわけで、それは結果として自分を大事にすることになります。

日本の社会では、こういうことから仏教用語で「利他利己（りたりこ）」という言葉があります。他を利する、「利他」です。だから他を利する、利他的に生きることが、最終的には自己を利することにもなっていく。だから、出発点は自己の方にあるんじゃないでなくて、他の方にある。だから他者を利するような生き方をすることが自己を利することになっていくということなんです。

面白いのは、この「利他」という言葉が最近若者たちの中で大流行していて、ついに女性週刊誌なんかは「利他的生き方」とか、それが見出しになっているような時代をつくってしまったといいますか。それで、いつの間にこの仏教語が回復したんだと驚いてしまうんですけど。結構今の若い人たちというのは利己的生き方というのは恥ずかしい生き方で、利他的生き方をしてこそ人間だみたいな、それがちょっとやり方がよく分からないから多少漫画的なことも含めてなんだけど、非常に今浸透してきているのです。彼らは、我々世代を利己的生き方の人たちと見ていて、つまり、自分の親たちをそう見ているといいますか、「何だかんだ言って、自分のことしか考えてない」と。そうではなくて、利他的に生きてこそ自分の生き方もあるという、あるいは自分が尊重される生き方があるという、そういうことを今結構若い人たちが非常に熱心になってきていて。一部、親のコピーみたいな利己丸出しの人もあるんだけどかなり多数派で、だから関係づくりに非常に熱心です。それが行き過ぎていて、「他人を傷つけてはいけない」というのがあって、だから議論するのが下手。下手に議論して、他人を傷つけたらいけないというか。だから、発言をするときものすごく慎重になるところはあるんで

すけども、とにかく何か直さなければいけないと思い始めた。

というのは、もうバブル崩壊以降の記憶しかない人が 30 歳近くまで来ているのです。バブル崩壊から 20 年たっていますから、5、6 歳からの記憶の人だと 25、6 歳になっているのです。だから、社会というようなものを多少なりとも意識するようになったあたりからが記憶だと言えば、もう 30 歳以下の人はバブル以降の記憶しかないのです。だから、それはもう右肩上がりに、経験がないし、それから常に仕事がないし、大学を出ても就職があるかどうか分からないと思っているし、それから失業した人は周りにいるし、派遣の人もとくさんいるし、その上に、自分のお父さんがリストラに遭ったりしているという、そういう世代がもう 30 歳まで来ているわけです。だからそれが利己的に、個人主義的に追求しても、もう駄目だということを身にしみているといえますか。だから必死になって、むしろ利他的生き方を考えるようになってきたと。言葉としても女性週刊誌まで「利他」になってしまったという、そういう感じですよ。

だから、やっぱり僕は「利他的」という言葉を使ってもいいし、本当に人のためにやってこそ自分があるんだとか、そういう生き方をもう一遍言わなければいけないし、人を大事にすることが結局自分を大事にすることになるんだということです。それでこそ、初めて関係はつくれると。だから、お金もそうなんだけど、ちょっと余分なお金があったら人のために使うという、そういう在り方といえますか。つまり、そこを突破しないと、やっぱりどうしても関係づくりというのは難しいという気がしています。

(司会)

大野さん、よろしいでしょうか。

すみません、時間が来ましたので、これで質問は終わらせていただきます。

冒頭に畦地理事も言いましたが、今回 1 回に限らず、まだご本人を口説いていけませんので約束はできませんが、毎年できればお呼びするようにこれからご本人を口説きたいと思っておりますので。そのときはまたご案内申し上げますが、ぜひその機会においでいただいて、ご質問等していただくようによろしくお願いいたします。

時間がオーバーしておりますので、今日は以上で終わらせていただきたいと思っております。どうかお気を付けてお帰りください。

どうもありがとうございました。